

# 駅の歌 百首選

真中朋久 選

わが色欲しよよくいまだ微かすかに残るころ澁谷の驛にさしかかりけり

齋藤茂吉「つきかげ」

電車の中で瞑目ししばらく妄想にふけていたのか。

鎌倉の駅の広場に輪を描きて迎への車とどまれる春

与謝野晶子「心の遠景」

今ならばタクシー乗り場だが、当時なら人力車か。

東京へものをまなびにゆく友を小さき駅にみおくるわれは

三ヶ島葎子「三ヶ島葎子全歌集」

所沢あたりでも、少年少女にとって東京は憧れの都だった。

子を負おひて／雪の吹き入る停車場に／われ見送りし妻の眉まゆかな

石川啄木「二握の砂」

こんどはどこへ？ もうすこし腰を落ち着けてほしいのですが。

兩國橋を渡りしが停車場の食堂に來て珈琲を飲む

古泉千樫「屋上の土」

啄木は上野。千樫は総武線始発駅の兩國駅に引き寄せられる。

左右より次第に高まり来る電車秋葉原駅は空の高どに

岡山 巖「帝都の情熱」

山手線をまたぐ総武線が開通。当時は驚くべき高さだっただろう。

とどまらで行く停車場か夜のまどの外をぼやけて灯の流れたる

尾上柴舟「朝ぐもり」

曇った窓。駅名が読めないが駅らしきところを通過する。

石炭と雪のみしんと待ちてゐし黒井といふ名の駅を記憶す

岡部 史「海の琥珀」

石炭は蒸気機関車の時代か。白と黒のコントラスト。

駅前の石炭の層にうらうらと桜花はなちりかかる真昼なりけり

岡本かの子「桜」

黒々とした石炭と桜花のコントラスト。

機関車にあかあかと人の顔を見つ夜の駅すぐる貨物車ながし

落合京太郎『落合京太郎歌集』  
釜の火に照らされた機関士と機関助手。

み冬なり曠野の駅に遅れて来る二時過ぎの汽車の煙いま見ゆ

日本の鉄道は時間どおりに運行するから「遅延」が題材にもなる。

塩湯浴み癒えざりし赤彦悲しきに今日下孫の駅の名も見ず

北原白秋『海阪』  
土屋文明『青南集』  
現「常陸多賀」。晩年の島木赤彦がこの近くに逗留した。

廃駅にならむといへる新橋の古停車場の夏の群衆

若山牧水『秋風の歌』  
「汽笛一声」の新橋駅は今の汐留あたり。

山形市の北に構へて仙山線の開通を待つ驛は新し

結城哀草果『群峰』  
仙山線が開通したのは1933年。

春雨の東京驛に骨甕となりて着きたりあはれ節は

中村憲吉『林泉集』  
九州で亡くなった長塚節。東京で通夜、郷里で葬儀が営まれた。

駅いづれば提灯ともる宿引の立ち並びをりつめたし夜風

佐佐木信綱『豊旗雲』  
昔は途中下車して宿をとることも多かったらしい。

はるゞ、と鉄路を見ては涙せし南の国の小さき停車場

柳原白蓮『紫の梅』  
悶々とした日々。ほどなく白蓮は九州から出奔することになる。

吹雪きつつ大津の駅に日はくれてなほ遠ゆかむ海路おもふも

永井ふさ子『あんずの花』  
滋賀県の大津か。四国に帰るには海を越えなければならない。

夜行車にわが乗らむとて駅近き薬屋にもとむねむり薬を

原阿佐緒『うす雲』  
心に懸かることがあると眠れない。

父と共に名古屋を過ぎし度ごとにきみ謹直に歩廊に在りき

泉 幸吉『樅木立』  
作者は住友家当主。通過駅で住友銀行支店長が挨拶に立った。

人気なき富山の駅にて出征兵われをば送りましたまひき君は

宮 柀二『純黄』  
昔は停車の短い時間にも会いに行つた。とくに出征のような場面。

夜の暗き驛のホームに降りて来て歌のこともしみじみ言ひにき

木俣 修「高志」

富山駅で宮柵二を見送ったのは木俣修夫妻。

國大いに興る時なり。停車場のとよみの中に、兵を見うしなふ

釈 迢空「天地に宣る」

永久の別れになることもある。迢空の場合にも。

妻が手にいだかるる兒の頬をつつきほほ笑む兵に發車のベル鳴る

窪田空穂「冬日ざし」

悲壯感は無いように見えるところに心をうたれる。

陸橋のもとにつどへる工員は突破作戦を思へるごとし

前田夕暮「富士を歌ふ」

軍需工場への通勤風景も殺氣立っている。常磐線日立駅。

この驛よりさらに支線に乗り換へて田舎へ還る英靈かなしも

川田 順「史歌大東亞戰」

遺骨移送列車には方向板と窓に「英靈」の表示を掲げたという。

東京駅いまだ瓦礫の秋の陽に見し父母よ生きて逢いし日

近藤芳美「黒豹」

生きて復員する人。中国や朝鮮半島から引き揚げてくる人々。

〈帰り水〉の蛇口ふたつのつやつやをひねれば門司の水落ちにけり

今野寿美「かへり水」

門司港駅。生きて復員した兵がここで日本の水を味わった。

三宮駅のホームのドーム状屋根にもこのこる焼夷弾痕

尾崎まゆみ「ゴタールの悪夢」

戦争の爪痕は今も残っている。曲がった鉄骨。銃撃痕。

通過駅その刻刻を知らせきてみ車とどめ給ふ三十秒

竹山 広「とこしへの川」

戦後の巡幸。戦中までは顔を見てもいけなかった天皇。

駅を出るスーツケースのおのおのが硬い尾を曳く音響かせる

中井スピカ「ネクタリン」

荷物の多い人は、だいたいキャスター付きのスーツケース。

坂出驛の赤帽小柄のままに老いわが手荷物を運びぐれにし

中河幹子「悲母」

昔は手荷物を運んでくれる「赤帽さん」がいた。

駅頭に柳行李のチツキなど見かくることも少くなりぬ

赤城猪太郎「点滅」

引換票をつけて荷物車に。荷物だけ託送することもあった。

伝言板のわが名すばやく拭き消して駅を出づれば木枯らしの町

大西民子「花溢れぬき」

携帯電話の無い時代、小さな黒板とチョークが用意されていた。

北にゆく汽車に向いて電報を頼み出で来し淡紅色とせいろの空

坂田久枝「すずかけ」

列車宛の電報を打つ。昭和の時代にも意外に通信手段はあった。

「スコヤカニユキカエリマセ」雷鳴のとどろく夜の駅にうけとる

坂田博義「坂田博義歌集」

電報は駅から駅に打電され、停車駅で乗客に渡されたのだろう。

傘もつて駅まで父さんお迎えに駅員さんと仲よしになる

柳 さえ子「ゆだねる」

遅くならず帰ってくるという前提。こういう風景があった。

紡績の女工の群れの一列車それも春なり奈良の停車場

錦織くら子「六疊の王宮」

戦前の女工さんたち。戦後もしばらくは「集団就職」があった。

日の暮れの里とふ日暮里駅過ぎてむかし旅せし人のさびしさ

米川千嘉子「あやはべる」

駅名には、さまざまに触発されるところがある。

幾山河揺られゆられて来る妻をまちをるゆゑに寂し潮騒

橋田東声「地懐」

大正時代の品川駅。当時は海の音が聞こえていた。

そのむかし青森駅は海のなか 海の底ひにそつと降り立つ

梶原さい子「あふむけ」

縄文遺跡への旅。当時はずつと海面が高かった。

予讃線鳥ノ木駅を過ぎしころまどろみて淡あはきねむりに入りぬ

高野公彦「水行」

通過駅の名をかすかに意識しつつ眠る。故郷はまだもう少し先。

「T05」駅番号が記されてホーム2面2線の地上

永田 愛「アイのオト」

東京メトロの神楽坂駅ではなくJR四国の板東駅。

綾瀬駅で常磐線になってゆく大きな鞆と車掌が変わる

森尻理恵「虹の表紙」

東京メトロとJR東日本の相互乗入れ。運転士も交代する。

長き乗務終へて月照る山峡の駅に降り立ち聞く虫親し

石川 啓「でんぐるま」

遠いところで乗務を終えて、宿舎で休むことができるのかどうか。

戦災の駅に切符を切りてをり負けて兵役解かれしわれは

岡田二郎「切符切りの歌」

戦後の鉄道は復員した人を多く受け入れた。

切符に小児断線ありしころ大人ありけり改札のむこう

大井 学「サンクチュアリ」

小児用切符を区別するために一部を切り落とした時代があった。

駅員がはまだ切符を手に取りて一枚ごとにスタンプを押す

長嶺元久「百通り」

鉄ではなくスタンプになった時代。

山ひとつふたつ越えれば改鉄かいけつの音が聞こえてきさうな駅舎

外塚 喬「鳴禽」

ローカル線などは、まだどこどころ鉄を入れるところがある。

ついと出し切符をつまみ抜きしでのみに自動改札すでにとほりぬ

小池 光「静物」

自動改札は切符を入れて出てくるまでが一瞬。

自動改札父をしばらくとざしたりわれはぬけたる八重洲口にて

上村典子「手火」

流れに乗るのは、慣れないとなかなか難しい。

思いがけず許してもらう春の日の切符を失くした改札口で

相原かろ「浜竹」

切符が無い！と気づいたときには狼狽する。

二百の部下職員によびかける 「親切で乗りよい明るい神戸駅」

宮崎信義「急行列車」

作者は国鉄に勤務。最後は神戸駅長を務めた。

袖口を濡らしつつ貨車のピラを削ぐ闘争のとき惨めなる管理職われ

前田道夫「きらめく翅」

職責ではあるが、ピラを剥がすのは俺の仕事なのか……。

憂ひ顔の青年ばかりなり昔勤めし駅の窓口を覗きてゆくに

田谷 鋭「乳鏡」

組合しか頼みにならぬ組合も頼れぬかも知れぬ乱れて思ふこと。

みどりの窓口みずからの席生まれゆくのを息つめて見るにんげんたちよ

高瀬一誌「高瀬一誌全集」

オンライン処理で目で予約が成立するのが驚きであった時代。

半開きの財布に指を差し込んで切符を待てる窓口の客

鯨井可菜子「アップライト」

その窓口も近年縮小方向。端末機を使うように誘導される。

かすかなるためらいの後でのひらにそつと切符を置く券売機

柳澤美晴「二匙の海」

近距離はカードが使われるようになって券売機も減りつつある。

電車の扉閉まらんとして押しこめらるわがくるしみて狭きあかしのみ

森岡貞香「未知」

満員電車に、これでもかというほどに押し込められる。

ラッシュ時に渋谷駅にて行いし押し屋のバイトも遠き思い出

桜田一夫「インターナショナル」

駅員さんのほかに、アルバイトまで動員する。

原宿の宮廷駅のバリアフリー篤き病ひのすめろぎのため

津金規雄「時のクルーズ」

がらんとした宮廷駅。大正天皇の病状を配慮しての構造とか。

われかつて諭を信じつつ夕闇の神田の駅に涕こぼしき

大辻隆弘「ルーノ」

視野が広がる感動も、悔しさも感じた若き日か。

聖橋ゆく人はみな白く照る御茶ノ水駅ホームより見れば

小島ゆかり「純白光」

六月。衣替えて夏服になった人々を見上げる。

池袋駅を底ひのごとくみて人の散粒はみな動きあり

上田三四二「遊行」

サンシャイン60が完成。新宿も超高層ビル建設が進む時代。

会うまでの時間たつぷり浴びたくて各駅停車で新宿に行く

俵 万智「サラダ記念日」

待つよりも、少し待たせるといふ駆け引きもある？

階段を二段跳びして上がりゆく待ち合わせのなき北大路駅

梅内美華子「横断歩道」

待ち合わせが無いときには自分のペースで。

駅のホーム隔てて互みに笑ひあふ夏の娘の白きひかがみ

秋山佐和子「半夏生」

箸が転んでも笑う頃の少女たち。

灯をかざす駅員に汽車せまりきて烈しく渡す夜のタブレット

石本隆一「木馬騎士」

タブレット端末ではない。単線区間に入るための通行票。

氷見線より溢れくる群集をわれ塞きて蝨つぶしに塩をとりしらぶ

岡部文夫「魚紋」

専売制であった塩やタバコ。闇流通を取り締まる立場。

えもの待つ痴漢と掏摸を待つわれら残して電車次つぎに発つ

御供平佑「車站」

鉄道公安官。痴漢も取り締まるべきだが、当時はまずは掏摸。

築地市場駅つねなま臭しなまぐさきこの世元気に生くる人群れ

馬場あき子「あさげゆふげ」

鮮魚市場は豊洲に移転したが、当面は駅名を変更しないらしい。

行き先は「鮮魚」と示されエプロンの伊勢湾の人ら乗る鮮魚列車 勾 彌子「月に射されたままのからだで」

伊勢から大阪まで運行する海産物持ち込み専用列車があった。

村崎野駅より乗りし箒売りが車内の隅に行きて立ちたり

柏崎驍二「百たびの雪」

こちらは箒の行商。高張る荷物を抱えては座るわけにいかない。

驛のまへえのきの梢にこの暁をこことかく群れて鴉はさわぐ

明石海人「百描」

ハンセン病隔離療養所へ向かう、その前夜。

大阪駅の拡張工事何時までぞ今朝はた霜の白かりにけり

菊池庫郎「地下道と松原」

変貌し続ける大阪駅。大阪駅の地下道を通って通勤する作者。

ユニクロとコインロッカー行き来して大阪駅できみとダンジョン

金沢青雨「またね」

地盤沈下による段差もあって、ほとんど迷路のような地下街。

路線図に色また増えて地下鉄の駅構内に吹き溜まる風

大森悦子「青日溜まり」

東京の地下鉄はかなり複雑。環状のようで環状にならなかったり。

地下駅の円柱滑ら未知の世の墓域におのづとまぎれこみしや

「雨宮雅子」雲の午後」

地下駅は地中の大伽藍のようでもある。

地下鉄に乗りてちかづく地下駅の明かりよとほき昨日のごとし

大松達知「フリカタイプ」

地中から地中へ。最前列車輛から駅が近づくのを見る時は特に。

山峡の小さき駅に下りたちて移住民の子のあゆみたどどし

齋藤 瀏「曠野」

北海道。開拓移民の厳しい生活を垣間見る。

暑き日を落機山の停車場に駈足の児等が梨葡萄売る

青山霞村「池塘集」

米国の広大な風景。そういえばエンジンも売り子から出発した。

大なる駅さへにさみし。／しべりやに移されてゆく／穢きたなき群れあり。

シベリア鉄道のどこかの駅。流刑の人々と遭遇する。

石原 純 『曇日』

札蘭屯じやらん屯のロシヤ乙女が抱へもちて野の花を売るチチハル駅よ

満州回想。革命を逃れて多くの人がロシア国外に出た。

若山喜志子 『眺望』

グルーネヴァルト駅17番線 鈴懸の木々の緑が線路を隠す

ベルリン市内から強制収容所へユダヤ人を送り出した駅。

小林幸子 『場所の記憶』

スターリンが核戦争に備へたる駅のホームは地下の深きに

サンクトペテルブルクのプーシキン駅。

楠井孝一 『モルゲンロート』

避難せる地下鉄駅にウクライナの絵を描くおさな一瞬映る

実際に戦争になれば防空壕になる地下駅。不安な避難。

中川佐和子 『夏の天球儀』

空襲の日の地下鉄よおぶわれし稚きあくび吾が見しものを

直撃弾で一部が不通になった地下鉄銀座線。

柴 善之助 『揚げる』

あぶらぜみかたぶらぜみととなえつつ駅で時計をさがしています

経費節減のためか、時計の数が少なくなっているという。

蒼井 杏 『瀬戸際レモン』

駅を出て我らみな強くつかみいる遅延証明書のひらひらを

遅延証明書は発行せず「ウェブを見ろ」というところも増えた。

齋藤芳生 『湖水の南』

富士吉田が富士山駅に名を変へてかのうどん屋はいづこにか消ゆ

駅名が変わる。駅舎も建て替えたり改装したり。

春日いづみ 『地球見』

どこの街にも似たる駅ビル名店街日本列島の旅情貧しき

ユニークな駅ビルもあるにはあるが、おおかたは。

富小路禎子 『不穩の華』

夢で見し新橋駅は酔つ払ひ一人もをらず壁は真緑

夢ならばどこへでも行ける。いつの時代の新橋駅だろう？

石川美南 『裏島』

壁のない建造物を駅と呼ぶ海からの風に人は吹かれて

電車の出入りする側に扉をつけるわけにはいかない。

田村 元 『昼の月』



点字ブロックの点からの影が午後五時を知らせている高架駅

岡野大嗣「たやすみなさい」  
小さな突起に夕陽が影をつくる。

乗り換えの駅の段差は覚えたり今日は一人で行かう、かまくら

ちよつとした段差も予想していなかったところで出会うと危険。

駅階段三段ばかりのくらがりをわれは占めつつ渴かざる泥

斎藤すみ子「梅園坂」  
豪雨の駅。運転再開のめどの立たぬ電車を待つ十数時間。

休止中と地図に書かれし常磐線浪江駅より実家をなぞる

三原由起子「ふるさとは赤」  
東日本大震災と原発事故によって長期間運休となった。

いーじゃんいーじゃん 春だけ電車が止まる駅 すげーじゃん 梅満開の庭

郡司和斗「遠い感」  
常磐線「借楽園」は梅の花の時期だけ営業する。

過ぎてゆくほのかなことば ひるがほのそよぎの中に無人駅ありき

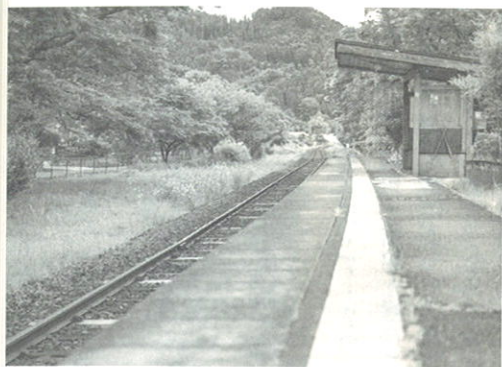
河野裕子「はやりを」  
心はいつもそこへ帰ってゆくような場所でもある。

百一歳とぞいふ老いた駅舎から此の若やいだ部屋は生まれた

岡井 隆『鉄の蜜蜂』  
東京駅の棟瓦造の駅舎の一部はホテルとしてリニューアルされた。

雪割灯ともして朝のポイントのすみやかに列車を通過せしめたり

真中朋久「重力」  
凍結防止のため、駅構内の転轍機の下に灯油ランプをとます。



日本の鉄道の歴史は百五十年を過ぎたところ。移動の手段、待ち合わせのために駅を利用した人たちの残した作品の、なんだこれは？ ということを確かめながら、短いコメントには反映しきれなかったが一つだけ。シベリア鉄道を利用した石原純が流刑の人々を見ているが、与謝野晶子にもまた「雛罌粟」の名歌の少し前に「シベリアに流されてゆく囚人」の歌がある。歌を通してまざまざと出会うことがある。

多行書きの作品は改行を「/」で示した。